

---

# **memory ~失われた記憶~**

空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

memor(y)失われた記憶

### 【NZコード】

N2881BA

### 【作者名】

空

### 【あらすじ】

福引きで当てた日間賀島の旅行券。

その券が引き起こした悲しい事件。

そして、失われた記憶。

果たして、事件は解決するのか、失われた記憶は戻るのか。

空です (\*^\_\_^\*)

初めての小説なので、上手く書けるかどうかは分かりませんが、精一杯書いていきます。あらすじだけを見ると、哀しい感じがしてしまつかもしれませんが、最後はハッピーエンドにしたいと思っております。カップリングについては、基本的には原作どおりです。（新蘭、平和、真園、光哀 etc.）出来れば、三田に一話くらいのペースで書いていきたいと思っております。ご感想やメッセージを頂けると、励みにも参考にもなります。  
よろしくお願いします (^\_\_^)ゞ

## file1・誘い（前書き）

名探偵コナンの一次創作です。

名探偵コナンを知らない方も楽しめるような小説にしていきます！

では、ご覧あれ(\*・・・)ノ

「うじてこんなことになっちゃったんだろ。」

暗闇の中、私は後悔していた。福引きで団体旅行を当ててしまつたことを。皆を、新一を、旅行に誘つたことを

一週間前

「ねえ、新一」

「ん?」

「あのね……話が、あるんだけど」

入学の準備をするために新一の家へ行つた帰り道、賑やかな商店街を抜け少し落ち着いた道に出たとき、私は隣で一緒に歩く高校生探偵（いや、卒業した今は新大学生探偵とでも呼ぶべきであろうか）である彼氏 工藤新一に話を切り出した。

「なんだよ？」

「じゃーんっ！ 見て、これ。日間賀島の旅行券！」

新一の反応を伺う。

「日間賀島？ 愛知県かい——じゃねーか！ 行つてこいよ。どーせ、おっちゃんとおばさんの家族三人で行くんだろう？」

「……もういい。新一に見せた私がバカだつたわ」

「？ 何で怒るんだよ？」

何の興味も示さない新一に、私はがっかりした。そして、怒りがこみ上げてくる。

「せっかく誘つたのに……」

「あー、俺は止めとくよ。面倒くせー」

「サイツティー！ もーいい、園子と和葉ちゃんと行くからつー！」

「お、おこつ、待てよ、蘭つ！…」

走つて帰つたせいか、汗が首筋を伝つ。

「寒つ……三月になつたからつて、まだ寒さが残るわね」

探偵事務所への階段を上がり、ドアノブに手を伸ばして、止めた。

(……ちよつと散歩でもしようかな……家に帰る気分じやないし……)

（園子、暇かな……）

携帯を取り出し、電話帳を開く。そして、親友である鈴木園子に電話をかけた。

『もしもし、蘭？』

「あ、園子？ 今、暇してたりしない？」

園子が何か言い出さない内に誘つ。そうでないと、またいつものように長電話になつてしまつ。

『え、あ、ひ、暇だけど？ 何、何があるの？』

「別に……ただ、家に帰る気分じやなくて……一人でいるのも嫌だつたから……」

『旦那と過ごせばいいじゃない！』

「嫌よつ！…」

『え……？』

「喫茶店ポアロに来て。席で待つてるから。梓ちゃんに聞けば、席は分かると思う」

そう伝えると、私はすぐさま電話を切つた。そして、階段を下がり、ポアロへと入つた。

園子が喫茶店へ入つてきたとき、自分が何をしていたのかも分からぬいくらいもの思いにふけつていたこと、初めて気づかされた。

## f ile1・誘い（後書き）

初めてまして、空です。

工藤新一・新大学一年生。探偵。

毛利蘭・新大学一年生。新一の恋人。幼なじみ。

鈴木園子・新大学一年生。鈴木財閥の「令嬢」。蘭の親友。

file1は蘭ちゃん目線です。そして、季節はといつと、卒業式が終わり、まだ寒さの残る三月です。

次回は「file1/5・嘘と真実」「file2・喫茶店」です。file1/5は、本編とはあまり関係ないのですが、工藤新一と江戸川コナンについて、新一君が蘭ちゃんに話す、という回想シーンです。蘭ちゃんがもの思いにふけっていた、その内容です。file2は、蘭ちゃんと園子ちゃんが

『蘭、話がある』

新一から電話がきた。どんな話なのか、気になる。けれど、それと同時に何故だか少し、怖い気もする。

『七時に……家に来てくんねーか?』

電話が切れると、すぐに制服から私服へと着替えた。今は五時半、ついさつき、新一に送つてもらつたばかりだった。

どんな話なのか、何となく想像がついていたりする。今まで散々誤魔化されてきたけど、探偵でなくとも、流石に気がついていた。

「ナン君が新一なのではないかと。

時計の針が六時半を指した。

「お父さん! 今日、新一と一緒に飯食べてくれるからね。ちゃんとして」

「ああ、分かつてゐよ、さつと行つてこい。」

怒つてる雰囲気が伝わる。早く行かなければ。

門の前まで行くと、新一が外で待つていた。

「新一っ!」

「蘭……」

「……まだ、七時前だね。あ、そuds! タ、飯作つてもいい?」

「……いーけどよ……その前に、話、してもいいか?」

「う、うん」

「とりあえず、家入れよ。寒いだろ?」

新一が玄関まで案内してくれた。小さいころから見慣れたその景色は、今も変わることはなく、思い出たちを美しいままに残していく。なんだか、懐かしく思えてくる。

「暖房、付けといたから、暖かいだろ?」

新一の声には、どこか落ち着かない様子が出でていた。「ありがとう」と一言伝えると、そのまま会話を無いままりビングへと歩き続けた。

リビングのテーブルに、一人で腰掛けた。

「……それで、話つて？」

切り出してみた。

「ああ……。俺、実は……　江戸川コナン、だつたんだ」

「……」

新一が言つには、新一はある組織が作った妙薬を飲んだせいで幼児化してしまい、江戸川コナンと名乗つた。そして、やつと組織を倒すことが出来、元の姿に戻ることが出来た、そうだ。

「……私、何度も疑つたこと、あつたよね」

「ああ……あん時は焦つた」

「どうして、言つて、くれなかつたの？　協力、できたかもしだいのに……！」

「……悪い。オマーを、不安にさせたくなかつた……巻き込みたくなかつた……守りたかつたんだ。だから　」

「哀ちゃんもつ！……哀ちゃんも、新一と同じなんじょ？」

しばらく、沈黙が続いた。

「……何で、分かつた？」

「何となく、雰囲気で……だつて、コナン君と哀ちゃんだけ、雰囲気が違つてたから……」

「そつか……」

また、沈黙が続いた。

「……哀ちゃんはどうしてゐの？」

「アイツは　」

哀ちゃんのことを教えてくれた。組織に関わっていたこと、逃げ出したくて妙薬を飲んだこと、そして

「もう一度、今度は、灰原哀として、やり直すつて言つてた」

「そう、なんだ……」

頭の中が整理つかなくなつてきた。新一がコナン君なのは想像してた。けれど、哀ちゃんまで関わっていたことは、初耳だった。新一の話は分かりやすいけど、話自体が難しかつた。

五分が経つた。だいぶ、整理がついた。組織のことも、今までのコナン君としての新一の態度、行動についても。

「…………新一……つりん、コナン君」

「…………」

新一を見た。新一は黙つて私の目を見つめた。すると、ポケットから何かを取り出した。

「…………なあに、蘭姉ちゃん」

それは、新一の話の中に出てきた、蝶ネクタイ型変声機だった。いつも、コナン君が付けていたものだつた。

「いつも、いつもいつも……私を守ってくれて、ありがとう……」

「…………ううと、僕の方こそ、いろいろ迷惑かけたりして、ごめんね。見守つてくれて、ありがとう」

そう言つと、新一は変声機をポケットにしまつた。そして、真剣な眼つきでこすりを見る。

「そして……これからは 僕が、工藤新一が毛利蘭を守る」

「…………し、新一」

突然の宣言に、戸惑う。

「イギリスで、ちゃんと言えなつたからな……」

「え……？」

そして、何かを決意したかのように次の言葉を口に出した。その瞬間、嬉しそぎて 泪が止まらなかつた。

「世界中の誰よりも、蘭が好きだ。もう、離れたりしねー。これからはずつと、ずっと 一緒にいよう」

コナン君のつき続けた嘘、新一が教えてくれた真実。その嘘と真実は、どちらも私や皆を守るためにものだつた。そんな新一を、今度は自分が守りたい。ずっと一緒にいたい、そう思った。

「あの時は嬉しかつたなー。…………ずっと、一緒にいよひつて、言ってくれたじゃない。なのに、何でつー？」

その時だつた。園子が入ってきた。

「ら、蘭つ？　どーしたの？」

「えつ、あ、園子つ！」

「さては、旦那と何かあつたな？」

「……」

私は園子に不満をぶつけてしまつた。

## file1・5・嘘と眞実（後書き）

空です (\*^-^\*)

蘭ちゃん線です。

シリアルアスっぽさを出したかったのですが……難しいですねー、やつぱり。

次回は喫茶店での会話です！

「あの時は嬉しかったなー。……ずっと、一緒にいようつて、言つてくれたじやない。なのに、何でっ！？」

喫茶店に入ると、レジのすぐ近くに蘭がいた。けれど、例え蘭の姿が見えなかつたとしても、今の大聲で気づいただろう。

「ら、蘭つ？　どーしたの？」

とりあえず、何があつたのか、聞いてみた。

「えつ、あ、園子つ！」

私を見て驚く蘭の表情には、何か不安を抱えている様子が伺えた。  
「さては、旦那と何かあつたな？」

「…」

分かりやすい。

「あのね、実は」

蘭が新一君に日間賀島の旅行券を見せ、その反応が、

「俺は止めとくー！？　何それ、旦那として、サイテーじゃないつ！　せつかく蘭が一人きりで過ごしたいからつて誘つたのに！」

「あの、そこまでは言つてないんですけど……」

「同じよ…」

何でアヤツは断るのかねー。……まあ、一応、旅行券を確認しますか。

「蘭。その旅行券、今持つてる？」

「え、ああ、あるよ！」

なるほど、確かに日間賀島の旅行券だ。ツアー形式になつていて、いろんな体験をすることが出来て、ホテルも豪華  
「つて、このホテル、鈴木財閥の経営してるホテルじやないつ！」

「えつ、うそー！？」

「ホントよつ！　あ、蘭、この券、二人じゃ行けないわよ」

気づいてしまつた。人数制限に。

「四人から十人つて、書いてある。少なくとも全部でもダメみたい」

「えー！？ そんな……」

「……じゃあ、服部君と和葉ちゃん、真さんと私の、六人で行くつてこりのばは、どう？」

チャンスは見逃しちゃ、ダメよね。ホテルは鈴木財閥が経営しているし、真さんと会いたいし、服部君と和葉ちゃんをくつけたいし。あ

「そういえば、服部君と和葉ちゃん、付合ひしてるの？」

「……まだ、みたいだけど……」

「せつか（愛のラブラブ大作戦、開始ねつー） で、どうする？」

「うーん……聞いてみないと……」

「じゃあ、三人に聞いてみてよー。私は真さんに聞いてみるわ

「え、そんな、急につ？」

「早くしないと、予定が埋まっちゃうかもしれないでしょー？ いい、今週中に聞いといてよね！」

蘭に最終確認をして、私たちは喫茶店を出た。

帰りながら、真さんにどうやって聞こりか考えていた。せつかく聞くな、何か仕掛けたい。

「はあー……いいなあ、蘭は。新一君と付き合えて。新一君が戻ってきたとき、すつごい嬉しそうだつたからなー。 てか、何で新一君、一つの事件解決するのに、かなりかかりつたんだろ？ 頭良いのに。蘭は、事件のこと、詳しく知ってるみたいだけど……あと、コナン君、あのガキンちゃんが消えたのも気になるわね」

考えているうちに、あることに気がついた。

「そういえば、コナン君が消えたー、三日後に、新一君が現れたわ

ね……」

そして、一つのキーワードが浮かび上がった。

「……同一人物……？ はは……んなわけないわよね。考えるの止めよつ」

馬鹿げたことを考えるのは止めて、真さんどうやつって伝えるかを

再び考え始めた。

その頃、新一は……

「ヘックシ……また、誰かが俺の噂しててーだな……」

## file2・喫茶店（後書き）

空です(\*・・ノ)

file2は園子田線で書きました。

いかがですかね？

次回は、蘭ちゃんと和葉ちゃんの、電話での会話を書いてつかな、と  
(^。^；)

では、file3もよろしくお願ひします

宿題をしどつたら、携帯が鳴った。

「誰や、宿題やつとんのに」

アタシは相手を確認すると、すぐに通話ボタンを押した。

「蘭ちゃんつ！？」

『あ、和葉ちゃん？』

「ひさしごりー！ どないしたん？ 工藤君と何かあつたん？」

『えつ…？』

工藤君が十一月に戻ってきたことは、平次からも蘭ちゃんからも聞いた。何や、事件のこと、詳しくは話されへん言われたけど、とりあえず、解決したつちゅうことは聞いた。

「まだ、恋人になつて3ヶ月やん。喧嘩でも、したん？」

『ちよつ、ちよつと待つてよ！ 喧嘩は、してないんだけど……』

蘭ちゃんは日間賀島の旅行券についての経緯を話し始めた。

「へー、何で工藤君、行かれへんのやろ？ セつかく蘭ちゃんが誘つたのに……」

『でしょ？ それで、園子に不満をぶつけたら……』

今度は、旅行券の人数制限について、そしてそれに対する園子ちゃんの意見を話してくれた。

「ええつ！ 蘭ちゃんらと、園子ちゃんと真さんつちゅう人と、アタシと平次の六人で行くつ？」

『う、うん……』

「蘭ちゃんはどう思うんや？ 六人で行くこと」

『私は、六人で行つたら、楽しいと思うよ？ でも、和葉ちゃんたちの予定や、真さんの予定もあるだろつし……それに！ 新一に一回断られてるのに、もう一回誘つて、来てくれるかどうか、分かんないし……』

アタシは蘭ちゃんの言つことは最もやと思いながら、やつぱり蘭ち

やんはええ娘やな、と思つた。ちやんと顔の「」と、考へてゐんや、  
と。

「なあ、蘭ちゃん。アタシに任せといへんか？ アタシと平次はい  
つでも行けるし、上藤君連れ出すんやつたら、ええ考えがあるんや  
！」

『ほ、本当？ 新一、結構手ごわいよ？』

「大丈夫やつて、平次使たらー。」

『服部君を、使う？』

「いや。せやから、蘭ちゃんは何もせんと待つといへどや。」

『う、うん……』

その後、しばりへ話してから電話を切つた。

「まずは、平次からやー。」

### file3・西への電話（後書き）

遠山和葉 新大学一年生  
服部平次 新大学一年生、探偵

この二人は、まだくつこていません（ワカ）

これからくつけようかと……（<。>・）

この作品の時間軸は……

- ・十一月に「ナンが元の姿、工藤新一に戻る。
- ・旅行は、卒業し、大学も決まった三月。です。

まあ、あまり深くは考えないでください！

面倒なことになっちゃうから……（ワカ）

では、file4は和葉ちゃんと平次の会話、西の服部と東の工藤、二人の探偵の会話です！

よろしくお願ひします

ではバ（<—>）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2881ba/>

memory ~失われた記憶~

2012年1月13日15時54分発行